

Title	「華僑」という神話を越えて：日本華僑のエスニシティとその社会文化的背景
Author(s)	王, 彩香
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44188
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	おう 王 彩 香
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 17247 号
学位授与年月日	平成 14 年 7 月 8 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	「華僑」という神話を越えて—日本華僑のエスニシティとその社会文化的背景—
論文審査委員	(主査) 教授 北村 卓 (副査) 教授 中埜 芳之 助教授 渡辺 伸治

論 文 内 容 の 要 旨

UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) も指摘しているように、20 世紀は「戦争と難民の世紀」であった¹。「国家」と「民族」という概念が定着し、「民族性」や「エスニシティ」の意識が高まるとともに、民族間で、多くの紛争が繰り広げられた。個人ではどうにもならない、民族、国家、国籍という枠組みが、多くの不幸をもたまた生み出したのである。そして、中国もその例外ではない。中国もまた、数々の少数民族を抱え、内乱や闘争を繰り返してきた。そして、多くの民が海外に流出し、華僑となった。

一般に、華僑は「海外に流出した中国人」と定義されている。しかし、その内部構造は複雑で、「海外に流出した中国人」という一言では、片付けられないほどに多様化している。その中でも、日本在住の華僑は、複数のグループに細分化されており、現在、時代を区分に、「老華僑」と「新華僑」の二つの勢力に分けて考えられている。一般に、19 世紀以降 1949 年までに日本にやってきた者を「老華僑」といい、1972 年改革開放政策以降に日本にやってきた者を「新華僑」という。本来なら、同じ中国人同士であるはずの華僑であるが、両者は互いの存在に違和感を抱き、「同じ民族である」ということを、エスニシティの部分で捉えられないでいる。そして、当事者の華僑自身が、「老華僑」「新華僑」という言葉を用いて、両者に区別をつけようと試みている。同じ民族の中にも分化が生じているのである。

本論では、インタビューとアンケートという調査方法を使って、このような実態を詳細に確認した。そして、今回の調査を通じて、日本華僑の多様性は、老華僑、新華僑という 2 つの枠組みだけでなく、それらの内部では、さらにいくつかの小さなグループに分類されていることが明らかになった。

老華僑においては、それらの小グループは世代区分によって分類することができた。なぜなら、彼らの指す「中国」は世代の区分によって変化しているからである。そして、そこには、その時代における日中の歴史的な背景、現実の中国との距離、祖先から脈々と受け継いだ血統、さらに、学校での教育などが影響している。ことに、教育の影響は大きく、元来華僑の中にはなかった「華僑」という意識を、世代を経るに従って、醸成してきた。別言すれば、「華僑」という概念は、華僑の中で自然発生的に生じたものではなく、教育という人為的行為によって形成されたものな

¹ 国連難民高等弁務官事務所編、『世界難民白書』、読売新聞社、1994、pp. 1-3

のである。このことの発見も本論の調査での重要な成果である。

新華僑においては、それらの小グループは各々の来日目的によって分類することができた。具体的には「中国帰国者」家族のグループ、日本人配偶者グループ、留学生・就学生グループ、不法就労者グループである。彼らは、来日目的によって現実には複数のグループに分かれているにもかかわらず、老華僑でないということから、一つにまとめられ、新華僑グループとして位置付けられている。しかし、同一の目的を持って渡日した老華僑とは違って、新華僑の来日動機、社会的背景には差異がはっきりと現れていた。したがって、彼らを一つのグループとして捉えることは不可能である。新華僑は、老華僑に比べて、渡日歴が浅いということ、日中の関係が比較的安定していること、海外渡航が容易になったことなどの要因から、彼らの多くは、頻繁に日中間を行き来している。そして、新華僑と老華僑との最大の差異は、新華僑は居住国において、あくまでも単独で行動し、コミュニティ²を形成しないということであった。換言すれば、老華僑には、華僑コミュニティなるものが存在するのに対し、新華僑には日本、もしくは中国というコミュニティしか存在しないのであった。

さて、老華僑の中の小グループには、世代による差異、つまり、時間軸によって見られる世代の意識変化があるが、新華僑の中の小グループには、同時間軸上に、老華僑が見せた様々な世代による差異を共存させている。出稼ぎを目的に、日本にやってきた不法就労者グループは、老華僑一世と同様に、未だ日本で自らが作りあげた擬似中国の中に暮らしている。「中国帰国者」家族のグループは、老華僑二世のように、自分のエスニシティについて、日中間で揺れ動く様子が見られる。留学生・就学生グループ、日本人配偶者グループは、老華僑三世のように、日本と中国の両方の文化を取り入れて、より良い方、より希望する方へと、選択していく様子が見られる。

このように、老華僑の場合には、歴史の流れによって変化していった意識が、新華僑の中には同じ時間座標で混在している様子が見られた。この発見は、本論における2つ目の大きな成果である。すなわち、日本華僑は多くの小さな集団が重なりあって、多様性を持ち、日本に存在しているのである。そこから、従来行なわれていた時代による分類は意味をなさないということがわかった。

次に、「血統」が薄れつつある中での今後の華僑のあり方を、本論では、「民族性 (racial traits)」という外見的な要素と、「エスニシティ (ethnicity)」という内面的な要素の2つの側面から考察した。従来、「民族」という概念は、血統という指標によって振り分けられていたのであるが、この考察を通して、実際に2つの文化を持つ者は、結果的にはどちらか一方、つまり、自らにとってもっとも適当と思える方のエスニシティを選択していく様子が見られた。しかし、主観的なエスニシティの存在だけで、一定の「民族」への帰属を確定できるわけではない。そこを補完するのが、民族コミュニティからの承認である。つまり、そのコミュニティで受け入れられて、はじめて、その民族の一員になれるのである。

さて、ここで本論のもっとも中心となる論題、「華僑とは何か」についての答えへとたどり着く。ここまでの考察に基づけば、「華僑」とは、主観的に、自らが「華僑である」と思える華僑エスニシティを持ち、なおかつ、客観的に、華僑コミュニティに承認された者だと定義できる。

それでは、従来考えられてきた華語の必要性はどうなるのであろうか。端的に言えば、海外華僑ネットワークへ参入する際にのみ、結果的に華語は必要とされる。このことは、海外華僑と日本華僑との関係を考察することによって明らかになった。

それゆえ、新華僑は、上で行った定義からは外れてしまう。つまり、「華僑」とは「老華僑」社会でその一員と承認された者のことを指しているのである。そして、ここでいう「華僑」とは、時代によって機械的に分けられた従来の「老華僑」ではなく、エスニシティとして華僑を選択し、華僑コミュニティの側からの承認を得た者を指す。

さらに考えてみれば、今まで老華僑集団に所属していたメンバーが、長い年月を経て、日本人社会に同化し、自らを日本人だと思えるようになることはよくあることであるし、一方、新華僑集団で、従来の老華僑社会と積極的につながっていくとする集団も確認されている。このように華僑といわれる人々の構成人員は大変流動的である。

今後の課題として、更に深く華僑社会を追っていきたいと思う。現在、老華僑三世を中心に、新華僑との結婚や交流、また商売上のつながりなどが見られる。そして、新華僑も徐々に定住をはじめている。老華僑一世のように、店

² ここではコミュニティを或る一定の共通意識をもった社会集団とする。

を構える新華僑、日本で生まれた新華僑の二世の存在など、老華僑と似通った道を通りながら、それでいて、まったく別の方向から世代を越えて変容しつつある様子が見られる。今後は、新華僑社会の出現とともに、従来の華僑社会が新たに統合されていく可能性も考えられるのではないかと思う。

論文審査の結果の要旨

1972年の改革開放政策以降、中国からは、日本人帰国者の家族、日本人を配偶者に持つ人々、留学生や就学生、さらには不法就労者など、現在「新華僑」とも呼ばれる中国人が多く来日して生活を営んでおり、以前から日本の社会に定着し、一つのコミュニティを形成している「老華僑」とは明らかに異なったあり方をしている。また老華僑の方も、世代を経るにしたがって、その意識が次第に変化してきている。

従来の華僑研究では、歴史的な観点からの研究が主であって、華僑の帰属意識やアイデンティティを扱った例はきわめて少なく、さらに、歴史的な研究成果を踏まえた上での、新華僑を含めた現代日本における華僑全体を扱った本格的な研究はいまだなされていない。

本論文は、歴史的研究や理論的研究を含む多くの先行研究やさまざまな資料を渉猟しつつ、実に精力的なインタビューと幅広くかつ綿密なアンケート調査（海外華僑に対するものも含まれている）、およびそれらの詳細な分析に基づき、老華僑・新華僑双方の意識と実態を明らかにすることによって、現代日本における華僑の全体像に迫ろうと試みたものであり、独創性に富む貴重な研究となっている。

本論文には、華僑の帰属意識を論じる際の方法論や日本語の表現などにおいて、若干不備な点も認められる。しかしながら、本論文全体の価値を損なうものではない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと判断する。